

飯島賢二の『恐縮ですが...一言コラム』

第 445 回 「守破離」という言葉がある

2011.11.6

いきなり「ウケ」狙いで、面白くもないパフォーマンスに執着する若者がいる。
なぜ面白くないのか...それは明確、「基本」がないのが見えているからであろう。
全くそのプロセスをマスターせずして個性はできず、まるで滑稽でしかないこと、論証されている。それは「守破離(しゅはり)」という言葉である。

元々兵法・武芸の用語だったようだが、不白流茶道(現:江戸千家)開祖の川上不白(江戸時代の茶匠)が記した『不白筆記』(1794 年)に、茶道の修行段階として、明記されて一般に使われるようになってきたようだ。

その意味を簡単に記すと、武芸や芸事を習得する上での段階を三つに分けた言葉で、柔道、剣道、茶道等、我国の伝統と文化である「○○道」の基本的哲学となっている。しかしそれはそのまま、「仕事ができるようになっていく過程」にも合致することである。つまり、「守破離」はプロフェッショナルに向けてのプロセスと言うことになる。

【守】とは、ひたすら師匠(上司・先輩)の教えを守っていく時期。一途に話を聞き、行動を見習って(あるいは真似て)師匠の**仕事**ぶりを自分のものにする段階である。
「道」の場合は、基本の「型」を完全にできるようになるまで、何回も繰り返すことである。少しずつ実績を上げていくと、いつの日か師匠から認めてもらう日がやってくる。

次の段階が**【破】**。いよいよ今までの考え方ややり方の枠を破っていく。師匠の教え通りにやるだけではなく、自分なりの考え方ややり方を、少しずつ盛り込んで試行錯誤を始める。師匠から教わること一辺倒で少しずつ**仕事**が分かってくることで、自分の考えと創意工夫で成長していくことが半々の時期となる。この段階が極めて大事である。

そして**【離】**の段階。師匠の教えを礎に、自分なりの考え方を盛り込みながら、プロへの階段を駆け上り、やがて師匠の教えが不要になる時がやってくる。
師匠の庇護の下から離れていき、自らが今度は師匠として、**【守】**から始まる弟子(部下・後輩)を教える立場になることができる。
まずは焦らず基本をしっかりと学ぶことが第一ステップ。基本を身につけてこそ、次にステップが充実するのだという教えである。

若手社員が仕事をできるようになるには、避けては通れない言葉である。
往々にして、今の若手社員の人たちは、大人になるのを焦りすぎる傾向がある。
「仕事ができる」ということは仕事をしていく上での型(基本的なやり方やしきたりのこと)を、少しでも多く身につけているということに他ならないのである。
「守」の時期にいい師匠に巡り合って、きちんと真似ることができ、型を身につけた人だけが「破」の時期の楽しさを味わうことができる。
スポーツでも芸事でもそうだろうが、仕事も同じ。基本を身につけていないのに、自己流で色々やっても、プロには決してなれない...という貴重な教えである。